

## ITA コーパス 原稿

### 朗読音声 324 文

1. おんな こ 女の子がキッキッ うれ 嬉しそう。
2. ツアツォに旅行した。
3. みんなしゅう 民衆 がテュルリー きゅうでん しんにゆう 宮殿 に 侵入 した。
4. ハイチ きょうわこく 共和 国でトゥーサンルーヴェルテュールがしょうり おさ 勝利 を 収められたのは、じっさい 実際  
おうねつびょう 黄熱病 のおかげだった。
5. レジヤンドルは みんなしゅう 民衆 をテュルリー きゅうでん まね 宮殿 に招いた。
6. じょげん 助言 はできないとデュパンは い 言った。
7. フランス じん 人シェフとにほんじん 日本人シェフは ぜんぜん ぜんちが 違う。
8. ちゅうごく がいこうだん 中国 の 外交団 にアタッシェとして はけん 派遣された。
9. ファシズム せいりよく 勢力 との そうりよくせん のぞ 総力戦 に臨む。
10. かぐ しょうにん 家具 商人 のフィシェルは、にぐるま こうま か 荷車 と仔馬を貸してくれた。
11. ローカルろせん 路線にはファンもおお 多い。
12. フェイントであいて 相手をかわしてからシュートでフィニッシュした。
13. 1877、プフェファーにより しんとうげんしょう はっけん 浸透 現象 が 発見 された。
14. ゆ 揺れるフェリーの の わたし 私 にとって くぎょう 苦行 です。
15. ホルロ・アラ・ティタルッフォという とくべつ りょうり で 特別なお料理も出ました。

16. 笛ふえの音おとがなるとウサギのキッドが早速さっそくぴょんと跳はねた。
17. あの旅客りょきやくは噂うわさのキャフェいに行くようです。
18. 目標もくひょうは一等賞いっとうしょうです。
19. ウサギのキッドは気分きぶんよくピョン、またピョンと飛とび続つづけた。
20. アフタヌーンティーをたのしみましょう。
21. 彼女かのじょはティピカルなフェミニストです。
22. 助手じょしゅたちとミツツィは探さがしている書類しょるいを見つけれなかった。
23. フィレンツェ、バドヴァ、ヴェネツィアはどれもイタリアの都市としです。
24. 楽譜がくふに次つぎのように書かいてあるのが、エーフェリチェです。
25. ショペンハウエルとニーチェの哲学書てつがくしょを本棚ほんだなから取り出とした。
26. 早速さっそく召使めいしい全員ぜんいんに知らせましょう。
27. 重いおも綿入わたいれを脱ぬいで、あわせに着替きがえる。
28. ボストンで、とあるチョプスイ屋やへ入はいって夕飯ゆうはんを食くった。
29. ろくすっぽ 休憩きゅうけいをとらず働はたらいた。
30. かつて一人ひとりで国府こくふに侵入しんにゅうした。
31. だが、今日きょうお前まえがここへ御入来ごじゅらいになったのは、どんなご用ようなのかな？
32. サブフランチャイザーを増ふやして目指めざせ百ひゃく店舗てんぽ。
33. 四国しこくでお遍路へんろを行脚あんぎゃしよう。

34. いつもの通りギャンギャン泣き出しました。
35. 先生は、立ったままニュースを見ていました。
36. 私はギョッと目を見開いた。
37. 友達へニューイヤーカーカードを送ろう。
38. 家政婦は休みにおしゃれなアウターウェアに身を包み一人で屋台を楽しみました。
39. ウォッカのお供には塩漬のきゅうりがあいます。
40. 山の向こうのミュンヘンの人たちが攻撃をしかけた。
41. ボスニア 国境 からの 攻撃 により、十一月 にヴァリエヴォが 占領 された。
42. シルヴィウスはデュボアと呼ばれていたフランスのユグノーの家で生まれた。
43. そのほかに 私 に来ることはなかったのです、百合枝は 涙声 になった。
44. ガル博士 百体 近く。
45. 日本政府からの 百兆円 を超える予算 要求 。
46. 写経 の 美 しさに 私 は 仰天 してしまった。
47. ソプラノ歌手ポリランダチヨは歌劇アイダの 特別 名歌手と 評判 です。
48. 貴方には 最初 百 ポンド渡します。
49. 社長 からの指示です。
50. どうも気まぐれというのは多少メフィスティックなものであるらしい。
51. 蛙 がピョコピョコ飛び回っています。

52. 魔境<sup>まきょう</sup>に足<sup>あし</sup>を踏み入<sup>ふ</sup>れる。
53. ヴァンダーヴォットタイム<sup>ちゅう</sup>中<sup>ちゅう</sup>は、いわゆるパーティーのよう<sup>は</sup>で晴<sup>は</sup>れやかです。
54. スピリッツとは<sup>じょうりゅうしゅ</sup>蒸留酒<sup>こと</sup>の事<sup>こと</sup>です。
55. ヌルシアのベネディクトゥスはアポロン<sup>しんでん</sup>神<sup>こわ</sup>殿<sup>を</sup>を壊<sup>かい</sup>し、ベネディクト会<sup>かい</sup>の<sup>しゅうどういん</sup>修道院<sup>た</sup>を建<sup>た</sup>てた。
56. ちょうどそのとき、デストゥパーゴがコップ<sup>た</sup>をも<sup>た</sup>って立<sup>た</sup>ちあがりました。
57. パフィーのグッツが<sup>のこ</sup>残<sup>へや</sup>らず<sup>お</sup>部屋<sup>つ</sup>に落<sup>お</sup>ち着<sup>つ</sup>いた。
58. エピファアーノフは<sup>さいふ</sup>財<sup>な</sup>布<sup>な</sup>を無<sup>な</sup>くした。
59. ポピュラーなソフト<sup>つか</sup>を使<sup>つか</sup>いセキ<sup>じょうたい</sup>ャな<sup>ふつきゅう</sup>状<sup>ふつきゅう</sup>態<sup>ふつきゅう</sup>を<sup>ふつきゅう</sup>復<sup>ふつきゅう</sup>旧<sup>ふつきゅう</sup>する。
60. チョコの<sup>ざいこ</sup>在<sup>ざいこ</sup>庫<sup>ざいこ</sup>あ<sup>ざいこ</sup>ったかな？
61. おめえ、この仕<sup>しこ</sup>込<sup>しこ</sup>みにやあ、どのくれえ<sup>じかん</sup>時<sup>じかん</sup>間<sup>じかん</sup>か<sup>し</sup>かるか知<sup>し</sup>って<sup>し</sup>っか。
62. それに、このほう<sup>からだ</sup>が<sup>からだ</sup>体<sup>からだ</sup>のた<sup>からだ</sup>め<sup>からだ</sup>にや<sup>からだ</sup>ず<sup>からだ</sup>っ<sup>からだ</sup>と<sup>からだ</sup>い<sup>からだ</sup>い<sup>からだ</sup>ん<sup>からだ</sup>だ<sup>からだ</sup>か<sup>からだ</sup>ら<sup>からだ</sup>ね。
63. 夏<sup>なつやす</sup>休<sup>なつやす</sup>みに、トラアヴェミュン<sup>りょこう</sup>へ<sup>りょこう</sup>旅<sup>りょこう</sup>行<sup>りょこう</sup>した。
64. こ<sup>いっしょ</sup>こ<sup>いっしょ</sup>で<sup>いっしょ</sup>一<sup>いっしょ</sup>緒<sup>いっしょ</sup>に<sup>いっしょ</sup>ウ<sup>いっしょ</sup>ェ<sup>いっしょ</sup>イ<sup>いっしょ</sup>ク<sup>いっしょ</sup>フ<sup>いっしょ</sup>ィ<sup>いっしょ</sup>ー<sup>いっしょ</sup>ル<sup>いっしょ</sup>ド<sup>いっしょ</sup>の<sup>いっしょ</sup>お<sup>お</sup>ば<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>お</sup>叔<sup>お</sup>母<sup>ま</sup>を<sup>お</sup>待<sup>ま</sup>った。
65. 八<sup>やっ</sup>つ<sup>やっ</sup>に<sup>やっ</sup>な<sup>やっ</sup>る<sup>やっ</sup>ウ<sup>やっ</sup>ォ<sup>やっ</sup>ル<sup>やっ</sup>ター<sup>やっ</sup>と<sup>やっ</sup>一<sup>いっしょ</sup>緒<sup>いっしょ</sup>に<sup>いっしょ</sup>出<sup>で</sup>た<sup>きょうだい</sup>兄<sup>きょうだい</sup>弟<sup>きょうだい</sup>が<sup>きょうだい</sup>い<sup>きょうだい</sup>た<sup>きょうだい</sup>が<sup>きょうだい</sup>、ウ<sup>やっ</sup>ォ<sup>やっ</sup>ル<sup>やっ</sup>ター<sup>やっ</sup>だ<sup>やっ</sup>け<sup>はっけん</sup>ん<sup>はっけん</sup>発<sup>はっけん</sup>見<sup>はっけん</sup>さ<sup>はっけん</sup>れた。
66. 最<sup>さいしよ</sup>初<sup>さいしよ</sup>の<sup>さいしよ</sup>ジ<sup>さいしよ</sup>ョ<sup>さいしよ</sup>ブ<sup>さいしよ</sup>は<sup>さいしよ</sup>ウ<sup>さいしよ</sup>ォ<sup>さいしよ</sup>ー<sup>さいしよ</sup>リ<sup>さいしよ</sup>ア<sup>さいしよ</sup>が<sup>さいしよ</sup>い<sup>おも</sup>い<sup>おも</sup>と<sup>おも</sup>思<sup>おも</sup>い<sup>おも</sup>ま<sup>おも</sup>す。
67. およそ<sup>ろっぴゃく</sup>六<sup>ろっぴゃく</sup>百<sup>ろっぴゃく</sup>メ<sup>ろっぴゃく</sup>ー<sup>ろっぴゃく</sup>トル<sup>ろっぴゃく</sup>先<sup>さき</sup>を<sup>うせつ</sup>右<sup>うせつ</sup>折<sup>うせつ</sup>です。
68. 新<sup>しんでん</sup>店<sup>しんでん</sup>オ<sup>しんでん</sup>ー<sup>しんでん</sup>プ<sup>しんでん</sup>ン<sup>しんでん</sup>の<sup>しんでん</sup>レ<sup>しんでん</sup>セ<sup>しんでん</sup>プ<sup>しんでん</sup>シ<sup>しんでん</sup>ョ<sup>しんでん</sup>ン<sup>しんでん</sup>に<sup>しんでん</sup>沢<sup>たくさん</sup>山<sup>たくさん</sup>の<sup>たくさん</sup>お<sup>たくさん</sup>客<sup>きゃく</sup>さん<sup>きゃく</sup>を<sup>きゃく</sup>招<sup>しょうたい</sup>待<sup>しょうたい</sup>し<sup>しょうたい</sup>た。

69. 脚本 作者 ピエール・オービュルナンの給仕クレマンが、主人の書斎の戸を大切に  
ひら  
に開いた。
70. われわれは、天主教徒か長老教会派のもので、天主教徒が多数を占めている。
71. 結局のところお互い五十歩百歩だ。
72. 突拍子もない話だが、決して嘘ではない。
73. ネットで懸案の解決を目指す。
74. 切れ味鋭いペティナイフは使い勝手が良い。
75. 指をくわえてぴゅーと一声口笛を吹いた。
76. クレンペ教頭は無骨な男だが、自分の学問の秘密には深く浸っていた。
77. 尻尾ふりたて、ひげくいそらす。
78. すべての獲物を望みどおりに狙う技術がある。
79. タコのグニャグニャした感触が嫌だ。
80. 私たちは、抽象的意識的自己を否定することで、本当の自己とは身心一如だとい  
し  
うことを知る。
81. 鹿島明神が釘で刺し貫いて、魚が動かないようにしている。
82. 私は手始めに、同業者から話を聞く努力をした。
83. とてもうれしそうにぴょんぴょん跳ねて出ていった。
84. 二分だけのオルガン演奏で終わってしまった。

85. ニセ<sup>きょうかい</sup> 教会<sup>だま</sup> に騙されるな。
86. およそ<sup>ひやくねんまえ</sup> 百年<sup>やくざい</sup> 前<sup>くすりや</sup> には、薬<sup>う</sup> 剤<sup>う</sup> として薬屋<sup>う</sup> で売っていた。
87. いっそ<sup>きやくほんか</sup> 脚本<sup>めさ</sup> 家<sup>ほう</sup> を目指した方<sup>かんが</sup> がいいかとも考<sup>かんが</sup> えた。
88. この書物<sup>しょもつ</sup> に誤謬<sup>ごびゅう</sup> があっても、純一<sup>じゅんいつ</sup> でない何<sup>なに</sup> もものにもインフェクトしないでしょう。
89. 仏教<sup>ぶつぎょう</sup> はインド<sup>ゆらい</sup> 由来<sup>しゅうぎょう</sup> の宗教<sup>しゅうぎょう</sup> です。
90. キャリーバッグは<sup>りょこう</sup> 旅行<sup>ひつす</sup> に必須<sup>ひつす</sup> 。
91. 本番前<sup>ほんばんまえ</sup> はメチャメチャ<sup>ふあん</sup> 不安<sup>ふあん</sup> になる。
92. 三角関数<sup>さんかくかんすう</sup> においてピュタゴラス<sup>ていり</sup> の定理<sup>ひつす</sup> は必須<sup>ひつす</sup> です。
93. 著名<sup>ちよめい</sup> なラニョン<sup>はかせ</sup> 博士<sup>かんじゃ</sup> が患者<sup>せつ</sup> と接<sup>せつ</sup> していた。
94. おもちゃの<sup>かたな</sup> 刀<sup>も</sup> を持った<sup>しょうねん</sup> 少年<sup>ひやくどいし</sup> が、お百度<sup>よ</sup> 石<sup>よ</sup> に寄りかかっている。
95. 食料<sup>しょくりょう</sup> の補給<sup>ほきゅう</sup> が急務<sup>きゅうむ</sup> であると伝<sup>つた</sup> えられた。
96. 展示会<sup>てんじかい</sup> であの作品<sup>さくひん</sup> のみ<sup>ふひょう</sup> 不評<sup>ふひょう</sup> だった。
97. 客人<sup>きやくじん</sup> をもてなすのは<sup>とうぜん</sup> 当然<sup>とうぜん</sup> です。
98. 旅行客<sup>りょこうきやく</sup> が<sup>たの</sup> 楽しめるように<sup>くふう</sup> 工夫<sup>くふう</sup> しましょう。
99. こんな<sup>じょうだん</sup> 冗談<sup>じょうだん</sup> のようなニュースはない。
100. 小さい<sup>ちい</sup> 星<sup>ほし</sup> をたくさん<sup>えが</sup> 描<sup>みずの</sup> いた、水<sup>みずの</sup> 飲み<sup>みずの</sup> グラスはよくある。
101. 柄<sup>え</sup> は、猫<sup>ねこ</sup> の尻尾<sup>しっぽ</sup> でもあるように、尖端<sup>せんたん</sup> をぶるぶると<sup>ふる</sup> 震<sup>ふる</sup> わせながら、動<sup>うご</sup> いていく。
102. 開店<sup>かいてん</sup> 当初<sup>とうしよ</sup> プリンが<sup>いちばん</sup> 一番<sup>う</sup> 売<sup>う</sup> れていた。

103. ロナルドホープ大尉<sup>たいい たいしょう</sup>が 大将<sup>きゆうこう</sup> のマンションへ 急行<sup>きゆうこう</sup> しました。
104. 日刊<sup>にっかん</sup> センティナル紙<sup>し</sup>のヘプバンです。
105. この 宝石<sup>ほうせき</sup> は、ひとつ 百万円以上<sup>ひゃくまんえんいじょう</sup> のお値段<sup>ねだん</sup>です。
106. チョウ<sup>なかよ</sup>と仲良<sup>なかよ</sup>くなるんだから。
107. 宇宙<sup>うちゅう</sup> では、エントロピー<sup>むさいげん</sup>は無際限<sup>ぞうだい</sup>に 増大<sup>ぞうだい</sup> している。
108. 川<sup>かわ</sup>の 中流<sup>ちゅうりゅう</sup> に 集落<sup>しゅうらく</sup> がある。
109. 是非<sup>ぜひ</sup>お 話<sup>はなし</sup> させて 頂<sup>ただ</sup> きたいと 思<sup>おも</sup>います。
110. お 隣<sup>となり</sup> さんが 蒟蒻<sup>こんじゃく</sup> を持<sup>も</sup>っていらっしゃる。
111. パーティーは 楽<sup>たの</sup>しむものです。
112. おてつと 大<sup>おお</sup>きく 書<sup>か</sup>かれた 番茶<sup>ばんちゃ</sup> 茶碗<sup>ちawan</sup> は、これら<sup>ひとびと</sup>の 人々<sup>まへ</sup>の 前<sup>お</sup>に置<sup>お</sup>かれた。
113. 私<sup>わたし</sup> のポケットの中<sup>なか</sup>には 携<sup>け</sup>帯<sup>たい</sup> 電話<sup>でんわ</sup>が入<sup>はい</sup>っています。
114. 彼<sup>かれ</sup>は 今<sup>こんど</sup>度は 牧場<sup>ぼくじょう</sup> へ行<sup>い</sup>って、沼地<sup>ぬまち</sup>で 小悪魔<sup>こあくま</sup>の 尻尾<sup>しっぽ</sup>一つ 見<sup>み</sup>つけました。
115. 五行説<sup>ごぎょうせつ</sup> による 占<sup>うらな</sup> いがあるという 情<sup>じょう</sup>報<sup>ほう</sup> あり。
116. テンプル君<sup>くん</sup>、既<sup>すで</sup>に 真逆<sup>まぎやく</sup> だと言<sup>い</sup>った。
117. 世界<sup>せかい</sup> 中<sup>じゅう</sup> の 様々<sup>さまざま</sup> なモニュメントを 訪<sup>たず</sup>ね 歩<sup>ある</sup>いた。
118. アンソニー・ホプキンスは 有<sup>ゆう</sup>名<sup>めい</sup> な 俳優<sup>はいゆう</sup> です。
119. 彼女<sup>かのじょ</sup> は 出<sup>で</sup>来る だけ ぴたりと 耳<sup>みみ</sup>を あてて 聴<sup>き</sup>きました。
120. 茶<sup>ちゃ</sup> 一つ 参<sup>まい</sup>らぬか、ま あいいで。

121. ボヤですんでよかった。

122. モンタギュ・ゴーシ<sup>きょう</sup> 卿<sup>き</sup> がマンチェスターに来た。

123. ウィスキーの水割<sup>みずわ</sup>りをガッツリ<sup>の</sup>飲んだ。

124. これやお祭<sup>まつ</sup>りを若いもの<sup>わか</sup>に見せる<sup>み</sup>にや持<sup>も</sup>ってこいだ。

125. 私<sup>わたし</sup> はイメージカラーをピンクに決<sup>き</sup>めた。

126. ムニャムニャ、もう食<sup>た</sup>べれません。

127. 満洲<sup>まんしゅう</sup> は雨季以外には雨<sup>うき いがい</sup>が少<sup>あめ</sup>ないと言<sup>すく</sup>われているが、わたしが 満洲<sup>まんしゅう</sup> にあるあいだは、

大戦中<sup>たいせんちゅう</sup> のせいか、ずいぶん雨<sup>あめ</sup>が多<sup>おお</sup>かった。

128. 均一<sup>きんいつ</sup> 居酒屋<sup>いざかや</sup>では一<sup>いちばん</sup>番<sup>う</sup> 売<sup>ふたり</sup>れても二<sup>はっせんえん</sup>人で 八千円<sup>はっせんえん</sup> くらいだ。

129. 願<sup>ね</sup>いをかなえる。

130. 最初<sup>さいしよつら</sup> 辛<sup>はな</sup>かったけど、花<sup>えんげい</sup>や園芸<sup>す</sup> が好き<sup>しつ</sup>だったから、失<sup>い</sup>意<sup>しつ</sup>が癒<sup>い</sup>やされないこともない。

131. ペピス爺<sup>じい</sup>さんはもう寝<sup>ね</sup>るらしい。

132. 直<sup>す</sup>ぐウィルキンソンを呼<sup>よ</sup>びに行<sup>い</sup>け。

133. お昼前<sup>ひるまえ</sup> ジャスパーさん宅<sup>たく</sup>へ 再<sup>ふた</sup>びお邪魔<sup>じゃま</sup>しました。

134. その 竜<sup>りゅう</sup> の 百<sup>ひゃく</sup> の 頭<sup>あたま</sup> が恐<sup>おそ</sup>ろしい。

135. 必要<sup>ひつよう</sup> なミョウバンの量<sup>りょう</sup> はプ<sup>か</sup>リントに書<sup>か</sup>いてあります。

136. マリー・ロジェはパヴェサ<sup>いえ</sup>ンタンの家<sup>で</sup>を出た。

137. 読<sup>よ</sup>み進<sup>すす</sup>むにつれ、ますます興<sup>きょう</sup>味<sup>み</sup> が湧<sup>わ</sup>いた。



138. 笑<sup>わら</sup>いかけながら一<sup>いち</sup>二<sup>に</sup>歩<sup>ほ</sup>近<sup>ちか</sup>寄<sup>よ</sup>った。

139. 地<sup>ち</sup>表<sup>ひょう</sup>を緑<sup>りょく</sup>化<sup>か</sup>して、温<sup>おん</sup>暖<sup>だん</sup>化<sup>か</sup>を抑<sup>よく</sup>止<sup>し</sup>する能<sup>の</sup>力<sup>うりよく</sup>を強<sup>つよ</sup>くする。

140. ハサミでブツツと切<sup>き</sup>った切<sup>き</sup>れ端<sup>はし</sup>をペットにあげた。

141. ホームランを打<sup>う</sup>つ。

142. プレゼントをギャロウェイさんに渡<sup>わた</sup>してください。

143. ケプラーの法<sup>ほう</sup>則<sup>そく</sup>について直<sup>ちよく</sup>接<sup>せつ</sup>私<sup>わたし</sup>に聞<sup>き</sup>いてきた。

144. ウェンディーズはハンバーガー屋<sup>や</sup>さんです。

145. しかし氷<sup>ひょう</sup>河<sup>が</sup>はアルプスだけにあるものではない。

146. この先<sup>さき</sup>百<sup>ひゃく</sup>年<sup>ねん</sup>も抹<sup>ま</sup>茶<sup>ちゃ</sup>は衰<sup>すい</sup>退<sup>たい</sup>しない。

147. 自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>を評<sup>ひょう</sup>価<sup>か</sup>するの<sup>の</sup>は会<sup>かい</sup>社<sup>しゃ</sup>であって、行<sup>い</sup>き過<sup>す</sup>ぎた自<sup>じ</sup>己<sup>こ</sup>表<sup>ひょう</sup>現<sup>げん</sup>は失<sup>し</sup>脚<sup>きゃく</sup>につながる。

148. 夜<sup>よる</sup>に吹<sup>ふ</sup>く風<sup>かぜ</sup>のヒュウヒュウという音<sup>おと</sup>が私<sup>わたし</sup>を不<sup>ふ</sup>安<sup>あん</sup>にさせる。

149. 可<sup>かわ</sup>愛<sup>あい</sup>な華<sup>きゃ</sup>奢<sup>しゃ</sup>な女<sup>おんな</sup>の<sup>こ</sup>子<sup>こ</sup>。

150. 水<sup>すい</sup>中<sup>ちゆう</sup>の金<sup>きん</sup>魚<sup>ぎょ</sup>をすくうためのポイ。

151. グレンエルギンはウイスキーの蒸<sup>じょう</sup>留<sup>りゅう</sup>所<sup>じょ</sup>です。

152. 一<sup>いっ</sup>寸<sup>すん</sup>法<sup>ぼう</sup>師<sup>し</sup>が、ヒョコヒョコと彼<sup>かれ</sup>の<sup>ほう</sup>方<sup>ちか</sup>へ近<sup>ちか</sup>づいた。

153. 連<sup>れん</sup>中<sup>ちゆう</sup>はリビングでぺちやくちゃ喋<sup>しゃべ</sup>って、警<sup>けい</sup>戒<sup>かい</sup>していない。

154. 平<sup>へい</sup>一<sup>いち</sup>郎<sup>ろう</sup>はシャツ一枚<sup>いちまい</sup>になっ<sup>て</sup>絹<sup>きぬ</sup>物<sup>もの</sup>の布<sup>ふ</sup>団<sup>とん</sup>の中<sup>なか</sup>へ潜<sup>もぐ</sup>りこんだ。

155. 下<sup>しも</sup>京<sup>ぎょう</sup>区<sup>く</sup>に引<sup>ひ</sup>っ越<sup>こ</sup>す。

156. 彼<sup>かれ</sup>の言葉<sup>ことば</sup>に一種<sup>いっしゆ</sup>不思議<sup>ふしぎ</sup>な感覚<sup>かんかく</sup>を覚<sup>おぼ</sup>えた。

157. この事業所<sup>じぎょうしょ</sup>には百人<sup>ひやくにん</sup>以上<sup>いじょう</sup>の人が勤<sup>ひと</sup>めています。

158. わたしの家<sup>いえ</sup>ばかりでなく、近所<sup>きんじよ</sup>の住居<sup>じゅうきよ</sup>といわず、商店<sup>しょうてん</sup>といわず、バラックの家々<sup>いえいえ</sup>ではみな草花<sup>くさばな</sup>を植<sup>う</sup>えている。

159. どうせ私<sup>わたし</sup>は馬<sup>うま</sup>の世話<sup>せわ</sup>をせにゃならんから、外<sup>そと</sup>へ行<sup>い</sup>こう。

160. ヤン・セチャンというお笑い芸人<sup>わら げいにん</sup>。

161. 男<sup>おとこ</sup>が妙<sup>みょう</sup>な顔<sup>かお</sup>をして、一瞬<sup>いっしゆん</sup>残忍<sup>ざんにん</sup>になった。

162. 普及<sup>ふきゅう</sup>活動<sup>かつどう</sup>に幻滅<sup>げんめつ</sup>した。

163. 雨<sup>あめ</sup>がぼつぽつ降<sup>ふ</sup>りだした。

164. ペリウィンクルやプランティンはブルーアイです。

165. 姫<sup>ひめ</sup>や侍女<sup>じじよ</sup>たちが、キンポウゲやタンポポの花<sup>はな</sup>を持<sup>も</sup>って、彼<sup>かれ</sup>の方<sup>ほう</sup>へ駆<sup>か</sup>け寄<sup>よ</sup>っていった。

166. 皆<sup>みんな</sup>の協力<sup>きやうりよく</sup>のおかげで帰郷<sup>ききやう</sup>できた。

167. ウォルターとワードが入室<sup>にゅうしつ</sup>すると、ノラが真<sup>ま</sup>っ赤<sup>か</sup>になった。

168. 今<sup>いま</sup>の持ち札<sup>も ふだ</sup>ではあがれず<sup>お</sup>に終わ<sup>お</sup>る。

169. 勉強中<sup>べんきやうちゅう</sup>は話<sup>はな</sup>しかけないで。

170. レパードの花壇<sup>かだん</sup>が枯<sup>か</sup>れ果<sup>は</sup>てた。

171. 蒸留酒<sup>じょうりゅうしゅ</sup>にミョウバン<sup>くわ</sup>を加<sup>くわ</sup>える。

172. 取<sup>と</sup>っつきにくい女中<sup>じょちゅう</sup>が三人<sup>さんにん</sup>いる。

173. レインボーブリッジは <sup>とうきょう</sup>東京 <sup>めいしょ</sup>の名所。

174. <sup>ひきょうもの</sup>卑怯者 <sup>あくとう</sup>は悪党です。

175. <sup>とつぜんうみ</sup>突然 <sup>と</sup>海へ <sup>こ</sup>飛び込んだ。

176. <sup>しごと</sup>仕事はどっさりとあります。

177. <sup>はまき</sup>葉巻パイプはありましたか。

178. <sup>やおや</sup>八百屋に行って <sup>い</sup> <sup>ひゃくえん</sup>百円 <sup>だいこん</sup>で大根 <sup>か</sup>を買った。

179. <sup>はん</sup>般若 <sup>にや</sup>とは <sup>きじょ</sup>鬼女 <sup>のうめん</sup>の能面 <sup>こと</sup>の事です。

180. <sup>にほん</sup>日本へ行くには <sup>い</sup> <sup>ふね</sup>船 <sup>ひこうき</sup>か飛行機 <sup>ひつよう</sup>が必要です。

181. <sup>まわ</sup>しかしパーで回 <sup>むずか</sup>るのも難 <sup>い</sup>しい。

182. <sup>にゅうよく</sup>のぼせないように <sup>ゆ</sup>入浴 <sup>りょう</sup>するには <sup>おんど</sup>お湯の <sup>だいじ</sup>量 <sup>と</sup>と <sup>だいじ</sup>温度が大事。

183. <sup>きたろう</sup>鬼太郎くんは <sup>じょうだんはんぶん</sup>冗談 <sup>ぬす</sup>半分 <sup>はい</sup>で盗 <sup>けが</sup>みに入 <sup>けが</sup>って怪我をした。

184. <sup>いし</sup>パーニ医師 <sup>こた</sup>がピシッと答 <sup>こた</sup>えた。

185. <sup>おとこ</sup>男 <sup>みょう</sup>の <sup>うご</sup>妙 <sup>あや</sup>な動 <sup>あや</sup>きが怪 <sup>あや</sup>しい。

186. <sup>わたし</sup>私 <sup>びょうき</sup>の病 <sup>せんてんせい</sup>気 <sup>は</sup>は <sup>せんてんせい</sup>先天性 <sup>な</sup>のです。

187. <sup>さんごくし</sup>三国志 <sup>かんう</sup>の関羽 <sup>しょうぐん</sup>という <sup>ゆうめい</sup>将軍 <sup>は</sup>は <sup>ゆうめい</sup>すごく有名 <sup>です</sup>です。

188. <sup>かこく</sup>過酷 <sup>ぎょうむ</sup>な業 <sup>た</sup>務 <sup>た</sup>に耐 <sup>た</sup>える。

189. <sup>まち</sup>町の <sup>にようぼう</sup>女房 <sup>ふたり</sup>らしい二人 <sup>づ</sup>連れ <sup>ひがさ</sup>が、日傘 <sup>も</sup>を持 <sup>はい</sup>って入 <sup>はい</sup>ってきた。

190. <sup>な</sup>名 <sup>な</sup>をツァウオツキイ <sup>な</sup>と <sup>な</sup>いった。

191. 飲<sup>の</sup>み<sup>かい</sup>会<sup>さんか</sup>の参加<sup>きよひ</sup>を拒否した。

192. 夫人<sup>ふじん</sup>が<sup>ぎやうてん</sup>仰天<sup>むり</sup>したのも無理はない。

193. セファドールはめまいを抑<sup>おさ</sup>える<sup>くすり</sup>薬<sup>くすり</sup>です。

194. 明<sup>みん</sup>の一<sup>いち</sup>訓<sup>くん</sup>詁<sup>こ</sup>学<sup>がく</sup>者<sup>しゃ</sup>は、宋<sup>そう</sup>代<sup>だい</sup>典<sup>てん</sup>籍<sup>せき</sup>の一<sup>ひと</sup>つにあげてある茶<sup>ちゃ</sup>せん<sup>けいじやう</sup>の<sup>おも</sup>形<sup>お</sup>状<sup>くろ</sup>を思<sup>おも</sup>い起<sup>おこ</sup>すに苦<sup>くる</sup>し  
んでいる。

195. 深<sup>しん</sup>海<sup>かい</sup>魚<sup>ぎよ</sup>は見<sup>み</sup>た目<sup>め</sup>は悪<sup>わる</sup>いがお<sup>おお</sup>い<sup>い</sup>し<sup>い</sup>い<sup>い</sup>こ<sup>こ</sup>が<sup>が</sup>多<sup>た</sup>い。

196. ニューヨークでイヴニングポスの記<sup>き</sup>事<sup>じ</sup>に注<sup>ちゆう</sup>目<sup>もく</sup>した。

197. 確<sup>たし</sup>かに<sup>ぎやうにゆう</sup>牛<sup>ぎ</sup>乳<sup>にゆう</sup>とコーンフ<sup>あいしやう</sup>レー<sup>ばつぐん</sup>クの<sup>あ</sup>相<sup>い</sup>性<sup>しやう</sup>は<sup>お</sup>抜<sup>は</sup>群<sup>ぐん</sup>だ。

198. そ<sup>い</sup>の<sup>めい</sup>一<sup>じ</sup>は、明<sup>めい</sup>治<sup>し</sup>三<sup>さん</sup>十<sup>じゅう</sup>七<sup>な</sup>年<sup>ねん</sup>の<sup>く</sup>九<sup>く</sup>月<sup>がつ</sup>八<sup>やう</sup>日<sup>か</sup>九<sup>ここの</sup>日<sup>か</sup>の<sup>よる</sup>夜<sup>よる</sup>とおぼえている。

199. マルメ<sup>てんしゆ</sup>ゾ<sup>な</sup>ンの<sup>か</sup>店<sup>や</sup>主<sup>しゆ</sup>は<sup>なか</sup>ジェ<sup>よ</sup>シーとは仲<sup>な</sup>良<sup>か</sup>しだ。

200. 釣<sup>つり</sup>竿<sup>ざお</sup>を<sup>かた</sup>肩<sup>かた</sup>に<sup>しよし</sup>か<sup>し</sup>け<sup>し</sup>た<sup>し</sup>処<sup>し</sup>士<sup>し</sup>あり。

201. 最<sup>さい</sup>新<sup>しん</sup>鋭<sup>えい</sup>機<sup>き</sup>に<sup>の</sup>乗<sup>こ</sup>り<sup>こ</sup>込<sup>こ</sup>む。

202. 誰<sup>だれ</sup>か<sup>うし</sup>が<sup>き</sup>後<sup>へん</sup>ろ<sup>こえ</sup>へ<sup>さけ</sup>来<sup>き</sup>て、変<sup>へん</sup>な<sup>こえ</sup>声<sup>さけ</sup>で叫<sup>さけ</sup>ん<sup>さけ</sup>だ<sup>さけ</sup>の<sup>さけ</sup>でぞ<sup>さけ</sup>っ<sup>さけ</sup>と<sup>さけ</sup>し<sup>さけ</sup>た。

203. お<sup>い</sup>お<sup>し</sup>で<sup>だん</sup>ら<sup>まえ</sup>の<sup>た</sup>石<sup>ど</sup>段<sup>ど</sup>の<sup>で</sup>前<sup>く</sup>に<sup>ま</sup>立<sup>ま</sup>ち<sup>ま</sup>止<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>っ<sup>ま</sup>て、そ<sup>で</sup>の<sup>く</sup>出<sup>ま</sup>て<sup>ま</sup>来<sup>ま</sup>る<sup>ま</sup>の<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>待<sup>ま</sup>ち<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>わ<sup>ま</sup>せ<sup>ま</sup>た。

204. 未<sup>み</sup>解<sup>かい</sup>決<sup>けつ</sup>の<sup>けんあん</sup>懸<sup>も</sup>案<sup>も</sup>を持<sup>も</sup>っ<sup>も</sup>て<sup>も</sup>重<sup>じゅう</sup>役<sup>やく</sup>と<sup>たい</sup>対<sup>たい</sup>峙<sup>じ</sup>する。

205. 薄<sup>うす</sup>月<sup>づき</sup>の<sup>ひかり</sup>光<sup>に</sup>が<sup>わ</sup>庭<sup>て</sup>を<sup>て</sup>照<sup>て</sup>ら<sup>て</sup>す。

206. 犯<sup>はん</sup>人<sup>にん</sup>が<sup>へ</sup>ど<sup>はい</sup>っ<sup>はい</sup>ち<sup>はい</sup>の<sup>はい</sup>部<sup>はい</sup>屋<sup>はい</sup>へ<sup>はい</sup>入<sup>はい</sup>っ<sup>はい</sup>た<sup>はい</sup>か<sup>はい</sup>わ<sup>はい</sup>か<sup>はい</sup>ら<sup>はい</sup>な<sup>はい</sup>い。

207. 湫<sup>けい</sup>谷<sup>こく</sup>か<sup>で</sup>ら<sup>ひやう</sup>出<sup>が</sup>た<sup>い</sup>氷<sup>い</sup>河<sup>っぽん</sup>が<sup>ごう</sup>一<sup>りゅう</sup>本<sup>りゅう</sup>に<sup>りゅう</sup>合<sup>りゅう</sup>流<sup>りゅう</sup>する。

208. ディスカッションを<sup>すす</sup>進める。

くずりゅうみょうじん まつ とうろう  
209. 九頭竜 明神 を祭るために 灯籠 をながす。

210. 今<sup>こんかい</sup>の資<sup>しりょう</sup>料<sup>づく</sup>作<sup>ふか</sup>り<sup>しりょ</sup>は深<sup>ひつよう</sup>い思<sup>せんじつ</sup>慮<sup>しゅうりよう</sup>を必要<sup>した</sup>としたが、先<sup>せん</sup>日<sup>じつ</sup>やっ<sup>と</sup>と終<sup>しゅうりよう</sup>了<sup>した</sup>した。

211. <sup>こっし</sup>骨子をしっかりと<sup>く</sup>組<sup>た</sup>み立てる。

212. <sup>ききゅう</sup> 気球 <sup>そら</sup> にのって <sup>たの</sup> 空を楽しむ。

213. 批評ばかりでなく 対案 も出すべき。

214. かれらは<sup>まく</sup>幕のあいだに<sup>きど</sup>木戸の<sup>そと</sup>外を<sup>さんぽ</sup>散歩しているのである。

215. 過去の数々の奇病が治るようになりつつある。

216. 購入者<sup>こうにゆうしゃ</sup>はポンプの修理<sup>しゅうり</sup>が必要<sup>ひつよう</sup>なことに気がついた<sup>き</sup>。

かれじしん                      ぎょうむ                      おも  
217. 彼自身は、レジ業務につきたいと思っている。

218. 地毛は <sup>じげ</sup> 金色 <sup>きんいろ</sup> なんです。

えんぴつ お ふぺん  
219. 鉛筆は折れやすく不便です。

220. ヒポクラテスは<sup>いがく</sup>医学<sup>ちち</sup>の父<sup>よ</sup>と呼ばれます。

221. ところが <sup>しょうにん</sup>商人 は、<sup>くに</sup>国 <sup>ちか</sup>ざかいの <sup>す</sup>すぐ <sup>まへ</sup>近くへ <sup>おな</sup>住まって、やはり <sup>まへ</sup>前と <sup>おな</sup>同じようにやっています。

222. 今<sup>いま</sup>まで明<sup>あか</sup>るか<sup>にかい</sup>った二階<sup>まど</sup>の窓<sup>きゅう</sup>は、急<sup>きゅう</sup>にまっくらになってしまいました。

223. アスファルトにかこまれたなかにきのいっぽんの木が一本。

224. <sup>なふだ</sup>名札<sup>ようい</sup>を用意する。

225. マッチョな男性<sup>だんせい</sup>はモテるそう。

226. 社務所<sup>しゃむしょ</sup>の人の話<sup>ひと</sup>に嘘<sup>はなし</sup>はなかった。

227. 行楽<sup>こうらく</sup>シーズンの京都<sup>きょうと</sup>は人<sup>ひと</sup>でいっぱい。

228. どこからかパチパチと音<sup>おと</sup>が聞こえる。

229. プロ野球<sup>やきゅう</sup>はどのチームが優勝<sup>ゆうしょう</sup>するだろう？

230. しかし、これではまるで私<sup>わたし</sup>が誘拐<sup>ゆうかい</sup>しましたと自首<sup>じしゅ</sup>して出るようなもので、そんな馬鹿<sup>ばか</sup>な  
ことをするやつはあるまい。

231. 切望<sup>せつぼう</sup>しつつ、主<sup>ぬし</sup>を待つ。

232. しばらくしてパチパチという音<sup>おと</sup>も止んだ。

233. 身分<sup>みぶん</sup>をわきまえず放った狂言<sup>はな きょうげん</sup>。

234. 天<sup>てん</sup>を翔ける竜<sup>か</sup>の姿<sup>りゅう</sup>は神秘<sup>すがた</sup>的だ。

235. 私<sup>わたし</sup>の精神<sup>せいしん</sup>と一脈<sup>いちみやく</sup>相通<sup>あいふう</sup>じるものがあると思いました。

236. 皆<sup>みんな</sup>も球場<sup>きゅうじょう</sup>に行きましよう。

237. コペルニクスはポーランドの天文<sup>てんもん</sup>学者<sup>がくしゃ</sup>です。

238. 海沿い<sup>うみぞ</sup>の旅館<sup>りょかん</sup>は眺め<sup>なが</sup>がいい。

239. 集中<sup>しゅうちゅう</sup>すると周り<sup>まわ</sup>が見えない。

240. 春木座<sup>はるきざ</sup>は今日<sup>こんにち</sup>の本郷座<sup>ほんごうざ</sup>である。

241. 私<sup>わたし</sup>の手<sup>て</sup>を引っ張<sup>ひ</sup>るようにして、手<sup>て</sup>のひらへくれました。

242. 北海<sup>ほっかい</sup>の荒波<sup>あらなみ</sup>は、その氷<sup>こおり</sup>の絶壁<sup>ぜつぺき</sup>の根<sup>ね</sup>を噛<sup>か</sup>んで、激<sup>はげ</sup>しく飛沫<sup>しぶき</sup>を散<sup>ち</sup>らしている。

243. 戦意<sup>せんい</sup>を喪失<sup>そうしつ</sup>させるのが勝利<sup>しょうり</sup>への近道<sup>ちかみち</sup>。

244. がちょうを飼<sup>か</sup>う。

245. ふあふあ<sup>わら</sup>と笑<sup>たの</sup>いながら楽<sup>てびょうし</sup>しく手拍子<sup>う</sup>。

246. 従軍<sup>じゅうぐん</sup>記者<sup>きしゃ</sup>は大尉<sup>たいい</sup>相当<sup>そうとう</sup>の待遇<sup>たいぐう</sup>を受<sup>う</sup>ける。

247. 茶碗<sup>ちやわん</sup>にかかるほど、シャツの袖<sup>そで</sup>のふくらかなので、搔<sup>か</sup>き抱<sup>いだ</sup>く体<sup>てい</sup>に茶碗<sup>ちやわん</sup>を持<sup>も</sup>った。

248. 色々<sup>いろいろ</sup>隠<sup>かく</sup>して今日<sup>きょう</sup>まで犯人<sup>はんんにん</sup>と共<sup>とも</sup>にいる。

249. 浦子<sup>うらこ</sup>は寝<sup>ね</sup>ながら息<sup>いき</sup>を引<sup>ひ</sup>いた。

250. 兄<sup>あに</sup>が邪険<sup>じゃけん</sup>にされた。

251. 彼<sup>かれ</sup>は不<sup>ふ</sup>服<sup>ふく</sup>そうに呻<sup>つぶや</sup>いた。

252. 摸造<sup>もぞう</sup>品<sup>ひん</sup>ばかりでなく、本物<sup>ほんもの</sup>のドイツ将校<sup>しょうこう</sup>や兵卒<sup>へいそつ</sup>のヘルメット<sup>う</sup>を売<sup>う</sup>っているのもある。

253. 彼女<sup>かのじょ</sup>と一緒<sup>いっしょ</sup>にいと落<sup>お</sup>ち着<sup>つ</sup>きます。

254. 困<sup>こま</sup>ってる人<sup>ひと</sup>に向<sup>む</sup>けて寄付<sup>きふ</sup>をしました。

255. 落<sup>お</sup>ち込<sup>こ</sup>んでいるのか、うつむいてじっとしている。

256. 改良<sup>かいりょう</sup>が進<sup>すす</sup>むとパンはど<sup>す</sup>んどんおいしくなる。

257. こんなことを言<sup>い</sup>いながら、気<sup>き</sup>の短<sup>みじか</sup>いおじいさんは下駄<sup>げた</sup>を突<sup>つ</sup>かけて、そそくさと出<sup>で</sup>て行<sup>い</sup>ってしま<sup>い</sup>った。

258. 彼女<sup>かのじょ</sup>と初<sup>はつ</sup>デート<sup>きょう</sup>の今日<sup>けふ</sup>は夢<sup>ゆめ</sup>うつつ。

259. おなじ <sup>とうきょう</sup> 東京 <sup>な</sup> の名をよぶにも、<sup>こんご</sup> 今後はおそらく <sup>きゅうとうきょう</sup> 旧 東京 と <sup>しんとうきょう</sup> 新 東京 とに <sup>くべつ</sup> 区別されるであ  
ろう。

260. <sup>こしふ</sup> 腰振り <sup>にふんかんつづ</sup> を二分間続ける。

261. <sup>おくびょうもの</sup> 臆病者 <sup>に</sup> が <sup>だ</sup> 逃げ出した。

262. <sup>えはがき</sup> 絵葉書 と <sup>いっしょ</sup> 一緒に <sup>ぎんいろ</sup> 銀色 の <sup>るあー</sup> ルアー を <sup>おく</sup> マッシュに送った。

263. オムライスには <sup>いちばん</sup> ケチャップ が一番。

264. ストレスは <sup>てきど</sup> 適度に <sup>はっさん</sup> 発散 しましょう。

265. この <sup>ひと</sup> 人 より <sup>はじ</sup> ぞ 始まり ける。

266. <sup>ちゅうがくせい</sup> 中学 生 の <sup>とき</sup> 時、<sup>ひしりょこうちゅう</sup> 避暑 旅行 中 に <sup>たいちょう</sup> 体調 を <sup>くず</sup> 崩した。

267. <sup>ぐんい</sup> 軍医 は <sup>びょういん</sup> 病院 の <sup>もん</sup> 門 に <sup>はい</sup> 入るのである。

268. <sup>いちにちじゅうあか</sup> 一日中 <sup>びやくや</sup> 明るい 白夜 は、<sup>いっさいたいよう</sup> 一切 太陽 が <sup>しず</sup> 沈まないこと <sup>お</sup> で起こります。

269. もう、あなたにばかりも <sup>せい</sup> 精一杯、<sup>だれ</sup> 誰にも <sup>み</sup> 見せられます <sup>からだ</sup> 体 ではないんです。

270. みんな <sup>そろ</sup> 揃って <sup>うみ</sup> 海に <sup>と</sup> 飛び <sup>こ</sup> 込んだ。

271. <sup>なんだ</sup> なんだ そりゃ、<sup>とうてい</sup> 到底 <sup>むり</sup> 無理 な <sup>ねが</sup> お願 いだ。

272. <sup>ちよう</sup> 腸 チフス は <sup>こわ</sup> 怖い <sup>びようき</sup> 病 気。

273. <sup>はいきゅう</sup> 排球 は <sup>こと</sup> バレーボール の 事 です。

274. マッチ を <sup>か</sup> 買い に <sup>はい</sup> 入った の かな。

275. <sup>ぼんさい</sup> 盆栽 は <sup>ふぜい</sup> 風 情 が ある。



276. やがて 陪審員 は合議をするために 法廷 を出て行った。

277. 芸術 の求める 永遠 性に疑問を感じる。

278. 聞きつけて、 件 の 姫 、ぶるぶるとかぶりをふった。

279. キェルツェをとおってドビエに、ザリピエからミエイに行く。

280. マリアーンスケー・ラーズニエを おとず 訪れる。

281. 乳牛 を見ながら、レテュの 入ったピッツァを食べる。

282. ウドウの 奏者 を 施療 した。

283. インスティテュートで、リデュースの 話 と併せて、ルデュックの 話 も聞いた。

284. ギェナーを 見て イェーイと 叫ぶ。

285. スィーディーを聞きながら、でゃーこんを食べる。

286. テヨさんはズィーブラを見た。

287. レヴォリューション。レギュレーション。エデュケーション。

288. ブレンドデオート。ラーチャン。

289. あっあの。いっいえ。えっええ。おっおい。んーとね。

290. いぶかしげに見上げた 雨雲 から、琥珀色のドラゴンがギュンと 現れた。

291. 布でギュギュっとヌンチャクを縛る。

292. 服を脱ぐが、いつも 上下 が逆さまだ。

293. 放課後の 音楽室 で、高音 を頑張って出した。

294. モゴモゴしながら言うギャグは面白くない。

295. 海水魚<sup>かいすいぎょ</sup>の漁業<sup>ぎょぎょう</sup>の一環<sup>いっかん</sup>として、稚魚<sup>ちぎょ</sup>が育て<sup>そだ</sup>られている。
296. ムンムンとした熱気<sup>ねつき</sup>に、あの淡水魚<sup>たんすいぎょ</sup>もへとへとになっている。
297. ヘスティア<sup>しよちよう</sup>所長<sup>じゆうにおんおんがく</sup>は、十二音<sup>さほう</sup>音楽<sup>し</sup>の作法<sup>し</sup>を知っている。
298. 主催者<sup>しゅさいしや</sup>は、このフェスのキャバが小さい<sup>ちい</sup>ことを、セシルから聞<sup>き</sup>いた。
299. 母<sup>はは</sup>は、サフランライスと、さつまいもの入<sup>はい</sup>ったシチューと、ポトフをハフハフしながら食<sup>た</sup>べた。
300. そして、左京<sup>さきょう</sup>と千紗<sup>ちさ</sup>はヘファ<sup>えき</sup>駅<sup>つ</sup>に着いた。
301. 根本<sup>ねもと</sup>と曽原<sup>そはら</sup>は主君<sup>しゅくん</sup>を批判<sup>ひはん</sup>した。
302. ケケっと笑<sup>わら</sup>いながら、津原<sup>つはら</sup>はパトカー<sup>の</sup>に乗った。
303. キュキュッと鳴<sup>な</sup>らした靴<sup>くつ</sup>でパス<sup>だ</sup>を出した。
304. ティファニーはパピーにムギュッと抱<sup>だ</sup>き着<sup>つ</sup>きながら、チュチュッとキスをし、センキュとい<sup>い</sup>言<sup>言</sup>った。
305. その義軍<sup>ぎぐん</sup>は、一ヘクター<sup>いち</sup>ルほふく前進<sup>ぜんしん</sup>をした。
306. ヘへと、きゃつは媚<sup>こ</sup>びへつらった。
307. ほとんどの被調査者<sup>ひちようさしや</sup>は、写真<sup>しゃしん</sup>を車載<sup>しゃさい</sup>した。
308. 補佐<sup>ほさ</sup>が、一酸化炭素<sup>いっさんかたんそちゅうどく</sup>中毒<sup>お</sup>になるというハプニングは起きなかった。
309. スチューデントが被災<sup>ひさい</sup>するファクターを、可能<sup>かのう</sup>な限<sup>かぎ</sup>り取<sup>と</sup>り払<sup>はら</sup>う。
310. カフェとは、ブレックファストとして、フォカッチャ<sup>た</sup>を食<sup>ば</sup>べれる場所<sup>ばしょ</sup>でもある。

311. 普通、<sup>ふつう</sup> 初級者<sup>しよきゅうしゃ</sup> では、<sup>こうおん</sup> 高音<sup>の</sup> を伸ばすことはできない。

312. 彼<sup>かれ</sup> からしたら、<sup>さちゅうかん</sup> 左中間<sup>み</sup> から見る景色<sup>けしき</sup> は貴重<sup>きちょう</sup> だった。

313. シェパードと<sup>どうきよちゅう</sup> 同居中<sup>に</sup>、フォスターはその格付け<sup>かくづ</sup> 表<sup>ひょう</sup> を見た<sup>み</sup>。

314. 去々年<sup>きよきよねん</sup>、<sup>きよすう</sup> 虚数<sup>ちようちよう</sup> とへ<sup>まな</sup> 長調<sup>について</sup> 学んだ。

315. 脚立<sup>きゃたつ</sup> の上<sup>うえ</sup> でヒュヒューと<sup>かぜ</sup> 風<sup>ふ</sup> が吹くと、<sup>かれ</sup> 彼は<sup>せすじ</sup> 背筋<sup>の</sup> を伸ばした。

316. 昼<sup>ひる</sup> にはペスカトーレを、<sup>よる</sup> 夜<sup>すし</sup> には寿司<sup>を</sup> をパクパク<sup>た</sup> 食べた。

317. ケフィアに関するこの本<sup>かん</sup> は、<sup>ほん</sup> 本<sup>しょほん</sup> は、<sup>さんびやくぶ</sup> 初版<sup>では</sup> 三百部<sup>くらい</sup> くらいだったが、<sup>つぎ</sup> 次<sup>はきゆうてき</sup> から<sup>ぞうか</sup> 波及的<sup>に</sup> 増加し  
た。

318. 皮膚<sup>ひふ</sup> が<sup>わたし</sup> 私<sup>の</sup> のフェチである。

319. 社販<sup>しゃはん</sup> で巨富<sup>きよふ</sup> を築<sup>きず</sup> くという、<sup>かれ</sup> 彼の<sup>もくろみ</sup> 目論見<sup>とちゅう</sup> は途中<sup>お</sup> でへし折られた。

320. 左表<sup>さひょう</sup> のとおりの<sup>ししゅつ</sup> 支出<sup>になる</sup> ことが、<sup>いみ</sup> ある意味<sup>しゃ</sup> わが社<sup>しゃふう</sup> の社風<sup>である</sup> である。

321. この古風<sup>こふう</sup> な酒<sup>しゅひょう</sup> 瓢<sup>こきょう</sup> は故郷<sup>のもの</sup> のものだ。

322. そのほつれが腐敗<sup>ふはい</sup> しているというのは、<sup>こちよう</sup> 誇張<sup>ひょうげん</sup> した<sup>おも</sup> 表現<sup>だ</sup> だと思う。

323. その映画<sup>えいが</sup> の<sup>しゅつえんしゃ</sup> 出演者<sup>かれ</sup> である<sup>しゅはん</sup> 彼<sup>かのうせい</sup> が、主犯<sup>である</sup> 可能性<sup>は</sup> はフィフティーフィフティーだ。

324. チュクンの<sup>はちよう</sup> 波長<sup>は</sup> は、<sup>きようつう</sup> バツンと<sup>共通</sup> している。